

# 地域に積層する履歴の痕跡を活かした地方都市 の景観まちづくりへの取り組み —岐阜県恵那市明智町を対象として—

佐々木 葉<sup>1</sup>・井下田 渉<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 早稲田大学創造理工学部教授 (〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1)  
E-mail:yoh@waseda.jp

<sup>2</sup>学生会員 早稲田大学創造理工学研究科 (〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1)  
E-mail:w.igeta@toki.waseda.jp

岐阜県恵那市では景観法にもとづく景観計画策定の一環として2009年度に地域別景観まちづくりワークショップWSを実施した。これを契機として具体的な活動が動きつつある。恵那市南部に位置する明智町では以前から「日本大正村」というコンセプトと組織のもとでまちづくりが行われてきたが、社会情勢の変化などから、観光客の減少、空家の増加などが進んでいる。大正村によるまちづくり活動によって地域イメージの確立と一定の観光資源は形成されたが、町並み形成に関しては特筆すべき成果は見られない。このような現状を踏まえ、大正時代というイメージに依存した町並みづくりではなく、近世から現代までに至る地域の履歴の積層性に着目した景観まちづくりを検討している。本稿ではこうした明智での取り組みを報告するとともに、地域計画における景観まちづくりの目的と手法に関わる知見を述べる。

**Key Words :** *landscape plan, visual environment improvement, local town, Ena city*

## 1. はじめに

岐阜県恵那市では景観計画の策定に際して、景観を地域のヴィジョンを可視化したものという位置づけに立ち、地域自治区を活用した地域ごとの議論を進めている。そのなかで明智町については、2009年度に地域別景観まちづくりワークショップ(以下WS)を開催してその目標と方向性を取りまとめた。さらに明智町の中心部を対象として、まちづくり交付金事業(現在は社会資本整備総合交付金事業)を活用した広場等の空間整備と、町並みに寄与する建物改修への補助金の支給の予算が確保され、2010年度から具体的な景観整備事業に着手している。その中で建物改修については、目標とする町並みづくりの議論が住民とともに行われており、著者らも関与している。

一方明智町は、日本大正村というコンセプトおよび組織によるまちづくりが1980年代半ばから行われており、多数の観光客をひきつけるといった成果によって、注目されてきた。また現在でも、明智町のまちづくりにおいては、大正村という概念を抜きにして議論することはできない。今年2011年は大正百年に相当するというこ

多のイベントが計画されるとともに、上述した空間整備もこの節目を意識して行われている。

日本大正村というまちづくり活動の特色についてはいくつかの報告があるものの<sup>1-3)</sup>、学術的なものはなく、また現在も進行形であるため評価は難しい。本論でも日本大正村の活動自体の評価には触れない。しかし、この活動の一環として過去に行われた町並み形成に関する調査と議論があるため、それとの対照を含めて、本稿では、現在も進行中である明智町の町並みづくりに関する議論の経緯と特徴について報告する。またその過程で得られた地域計画における景観まちづくりの目的と手法に関わる知見を述べる。

## 2. 明智のまちづくりの概要

岐阜県恵那市明智町は、岩村と並んで恵那市南部の歴史的拠点となるまちである。南北街道と中馬街道が交差する近世から交通の要衝であるとともに、明治以降は、紡績業や窯業といった第2次産業を時代の変遷に応じて導入し、生業の基礎を維持してきた。現在も中心部から

少しはなれた位置に工場団地が点在し、また名古屋へも通勤圏にある。しかし現在の人口は約6500人（平成17年）で減少傾向にあり、特に街道沿いの中心部においては高齢化と人口減少が進み、空き家も増加傾向にある。

明智町において、日本大正村というコンセプトでのまちづくりが始まったのは、1980年代半ばであり、工場生産高の低下や国鉄明知線の廃線問題など、まちの先行きが危ぶまれていた時期である。澤田正晴という写真家が、明智のまちには大正の雰囲気があるため大正村という看板を立てれば人が来る、という提案をしたことがきっかけとなって、地域住民によるボランティアなまちづくり活動が始まり、1984年に大正村を立村、手探りでイベントや組織作りをすすめ、1988年に財団法人日本大正村を設立した。もとより具体的な核施設や資源がなかったが、そのイメージ戦略と情報発信の功によって観光客が多数来訪した。それをうけた地域住民による来訪者のもてなしに始まり、徐々に観光資源となる施設の整備やイベント開催によって、年間40万人程度の来訪者を得ていた。この流れの中で公的資金を投入した施設としてロマン館やロマン亭なども建設された。開始から約10年間は事業展開も順調であったが、1995年をピークに有料施設の入館者数は急激に減少していった。現在でも財団法人日本大正村は地域の様々な活動を担い、まちづくりにおけるリーダーとしての役割を果たしているが、理事等も高齢化が進み、活動の転機を迎えている。しかし明智イコール大正村、というイメージは対外的に強く、また地域住民自身にも浸透しているため、これに代わる何らかの新しい展開は見えていない。

### 3. 日本大正村における町並み整備

大正村のまちづくり活動は、明治村とは全く異なり、大正時代を象徴する具体的な建造物などがなく、雰囲気とソフト活動によって展開したものである。逆に言えばハードに頼らない住民の主体的活動という点が注目を浴びた。しかし来訪者が増えるに従い、やはり具体的に見るべきものや施設が求められた。そのため竣工は明治時代であるが擬洋風の趣きがある旧役場の建物や、明治期に竣工し大正時代の町の反映を語る繭蔵および町屋を活用した資料館の整備などが進められた。景観整備に関しては、1988年には「日本大正村街並計画」が立案され、その基本的考え方は①街全体がひとつの博物館、②住民と一体になって街並を造る、③現在ある資料館や村役場などの観光資源を街並のキーとなるポイントとし、他の家屋はそれと調和するなり、マイナスにならないように順次改修する、とされている<sup>4)</sup>。また1988年には「日本大正村景観カルテ1988」が作成されている。この

作成を担当したのは筑波大学の小場瀬令二氏で、カルテ作成のために行った景観分析の結果が報告されている<sup>4)</sup>。

そこでは建物3軒程度が写った斜め方向からの街並の写真を用いて、好ましいもしくは好ましくない要素を住民に指摘してもらうという写真指摘調査法によるデータを得ている。その結果、好ましい要素としては概ね伝統的な木製の窓や玄関、格子など、好ましくない要素はトタンやモルタルなど近代的な素材の壁などと看板類となっている。またガスボンベや自動販売機、前面看板などは数は少ないが存在は目立ち好ましくないといった結果が得られている。さらに家屋種別分布調査がおこなわれている。その際の実績は、観光拠点、観光対応、地元伝統、地元モダン、住宅の5種類となっている。このうち観光対応（飲食店や土産物屋など）は、積極的に大正風のデザインに改造するインテンシブを持つ、とされている。これに対して地元客を対象とした商店は、伝統的な店構えのものとモダンなものがあり、後者にはさらに前面改修タイプと洋風ビルタイプがある。これらの建物を構成する要素は好ましくないとされるものが多く、景観的には最も問題であるとしている。以上のような調査結果をもとに、カルテにおいては、好ましくないとされる要素を好ましい要素へ変えていくような修景の方向性が示されている。

こうした景観、街並への指向は明智にかぎらず多くの場所で見られる。全体的に、木製で伝統的な意匠による要素への好みが高く、近代的な工業製品への反発は強い。色にしても、茶系やモノトーンなど落ち着いた色が好まれ、原色に近い色は厭われる。そして好ましくない要素を撤去あるいは好ましい要素へと改修していくことを街並整備の方向性として示している。これは全国の多くの景観計画にもみられる傾向である。

明智においてこのカルテをうけて行われたと思われる行為のひとつに、プロパンガスのボンベを板で覆うことがあり、これは日本大正村の活動として行われた。明智町ではこれまで法的根拠をもつ街並に対する基準や補助金の制度はなかった。その中でも、いくつかの民間の建物が修景されたり、公的な建築物、つまり銀行や郵便局はレンガや下見板張りをういた外観に改築された。また新規に建設された観光拠点施設のロマン館とロマン亭は、かなり安易な大正ロマン風と呼ばれる外観となっている。

つまり、日本大正村のコンセプトのもとで行われた街並形成は、大正時代を象徴する建築物の特定や吟味がなされないまま一部にそのイメージがとりいれられ、その他については一般的とも思われる伝統志向の価値観に基づいた修景方針が示されていた。

#### 4. 景観まちづくりWSと中心部の町並み検討のスタート

恵那市としての景観計画策定の一環として行われた地域別景観まちづくりの検討は、明智地域のほかに、岩村地域（城下と富田の2箇所）と山岡地域の計4箇所において、2009年10月から2010年3月までにそれぞれ4回のWSを開催することで進めた<sup>5-8)</sup>。この検討においては、地域の将来ビジョンを語ることを経て、景観まちづくりの目標を、空間・生業・文化の三側面からまとめている。なお明智でのWS参加者の多くは日本大正村の関係者であったが、WSプログラムにおいては特に大正村というコンセプトを前提とせず、参加者から提示される様々な景観資源や課題の中のひとつとして、大正村に関する事項が扱われた。

こうして検討された地域別景観まちづくり計画を実現するためのアクションプランのひとつとして、明智においては中心部を対象とした具体的な町並みのルールづくりが位置づけられていた。ところが現在進んでいる中心部の町並みのルール作りに関する議論は、まちづくり交付金事業のもとでの修景事業という位置づけにあったため、市役所内の担当部署が異なり、景観計画のながれとは不連続な形でスタートしていた。そのため検討の組織として「明智町大正時代のまち並み保存準備会」（以下準備会）として組織され、中心部の自治会からの代表者ら17名が参加して、2010年9月から会議が重ねられていた。準備会の会則には、「明智町の大正時代のまち並みを保存するために沿道住民で組織する保存会を設立することを目的とする」と記されている。景観まちづくりWS参加者もこの準備会に関わっていたが、地域別景観まちづくり計画とのコンセプトにおける整合性という観点からのチェックがされぬまま、明智イコール大正村、大正時代、というイメージからなんとなく会の名称と目的が決定された。交付金事業としてのスケジュールや大正百年祭に間に合わせるなどの時間的制約や関係者の輻輳も影響していたと思われる。

準備会のスタート後、その名称や議論の様子に不安を抱いた著者らが、町並みの現状調査を基にした議論の必要性を提言し、2010年11月の第4回以降準備会に参加することとなった。

#### 5. 明智の町並み調査結果

以上の経緯を受けて、中心部の町並みの現状を把握するために、2010年10月から数回にわたり、南北街道、中馬街道、およびそれらに接続する主要な道沿いの建物約200軒のファサードの調査を行った。調査は建物正面か

らの写真撮影と外観構成要素（屋根・庇・外壁・開口部・しつらえなど）、老朽度の把握である。その結果をもとに、建物のタイプを大きく敷地形状と建物構成から町屋およびそのバリエーションである町屋グループと、それ以外の非町屋グループに区分し、さらにそれぞれを配置構成や意匠等から分類した。その結果計17タイプを抽出し、各タイプの特徴と分布を取りまとめた（表1、図1）。あわせて正面から撮影した写真を加工した連続立面を作成した。また、特徴的な要素として、街道沿いの建物の間に見られる幅半間以下の通路で地域の人々に「あかみち」と呼ばれている空間、および歴史的・伝統的とはみなされないが現在ほぼ使われなくなりつつある意匠として細かいタイル貼り・左官仕事・型ガラスのバリエーションを採取した。

以上の調査結果を準備会に提示し、明智の町並みが実に多様な建物から構成されていること、またそれぞれの建物はその立地・用途・建設や改修の時代を反映しているとみなせることを説明した。各建物の建設年代は把握できていないが、少なくとも大正時代に建設された建物はあったとしても極一部であること、また「大正時代のまち並み」というイメージが、具体的には何を指すかが特定できないことも暗示した。大正時代のまち並み保存という名称と目的でスタートした準備会に参加してきた住民にとっては、当然のことながら混乱が生じた。そのため、現地確認を改めて行い、各自が町並みをどう評価するかなどをWS形式で議論し、今後の方向性を再度確認する段階に2011年5月現在はある。

#### 6. 景観まちづくりにおける町並みのとらえ方と表現

以上のように、明智の町並みの議論は迷走しつつ現在も進行中である。その過程で複数の知見が得られたと著者は考える。以下順に述べる。

まずは、まちづくりや町並み作りの議論において、地域を表現する明快なイメージがあることによる問題である。明智における日本大正村というまちづくり活動自体の評価は冒頭に述べたようにここでは不問とするが、少なくともそのイメージは町並みの議論においても、大きな影響を与え、はっきり言えばミスリードの方向に働いていた。現在各地で歴史的な人物や事象、あるいは食べ物やキャラクターをイメージの核としたまちづくり活動がみられる。最終的には空間や建物というハードを操作することに繋がる議論においては、常に実体と対照されたコンセプトとしての吟味と実現可能性、さらにその持続性を照査しなければならない。そのためには議論の場に提供される資料が重要となる。

表1 明智の町並みを構成する建物タイプ

町屋グループ		非町屋グループ	
町家 タイプA	伝統的な町屋形式の建物で、開口・奥行きなどの規模が大きく、意匠も木造主体で伝統的であるもの。	現 数 タイプ	建物本体ではなく櫓が通りに面しており、その意匠が伝統的なもの。
改修町家 タイプA	町屋Aと同形であるが、改修によって外観に現代的な素材の使用がみられるもの。外壁や建具の全体および部分に非木質系の素材（トタン、アルミサッシなど）が用いられているもの。	住宅 あり タイプ	町屋形式ではないが、木質系の在来和風意匠の住宅で、通りに面して庭があるもの。
町家 タイプB	伝統的な町屋形式の建物であるが、開口または奥行きが小さく、意匠は木造主体で伝統的なもの。長屋も含む。	住宅 なし タイプ	町屋形式ではないが、木質系の在来和風意匠の住宅で、庭がなく建物が通りに接しているもの。
改修町家 タイプB	町屋Bと同形であるが、改修によって外観に現代的な素材の使用がみられるもの。外壁や建具の全体および部分に非木質系の素材（トタン、アルミサッシなど）が用いられているもの。	現 代 風 住宅 タイプ	町屋形式ではなく、建物意匠、外壁が在来和風ではなく現代的な住宅。ハウスメーカーの住宅が該当する。
店構え改 修タイプ A	伝統的な町屋形式の建物であるが、通りに面したファサードを店舗営業のために改修しているもので、1階と2階のデザインに一体性が感じられ、看板建築のように見せているもの。	独 立 店 舗 タイプ	町屋形式でない戸建ての店舗で、現代的な意匠・素材が用いられているもの。
店構え改 修タイプ B	伝統的な町屋形式の建物であるが、主に1階部分を店舗営業のために改修しているもの。	事 務 所 公 共 施 設 タイプ	規模が大きく、現代的な意匠・素材が用いられている事務所や公的な建物。
現 代 風 改 修 タイプ	伝統的な町屋形式の建物であるが、事務所や店舗として利用するに際して現代な素材を用いた改修が全体的に見られるもの。	蔵	漆喰壁の蔵造りで、伝統的な形態をとめているもの。
洋風・擬 洋風 タイプ	基本は町屋形式の敷地および建物形状であるが、外観に洋風もしくは擬洋風（明治時代にみられる和洋混在）の意匠が見られるもの。	付 属 物	車庫や倉庫の用途にもちいられている付属的建物。
特殊 タイプ	伝統的な町屋形式の敷地にあるが、3階建ての特殊なもの。（該当：一軒のみ）		

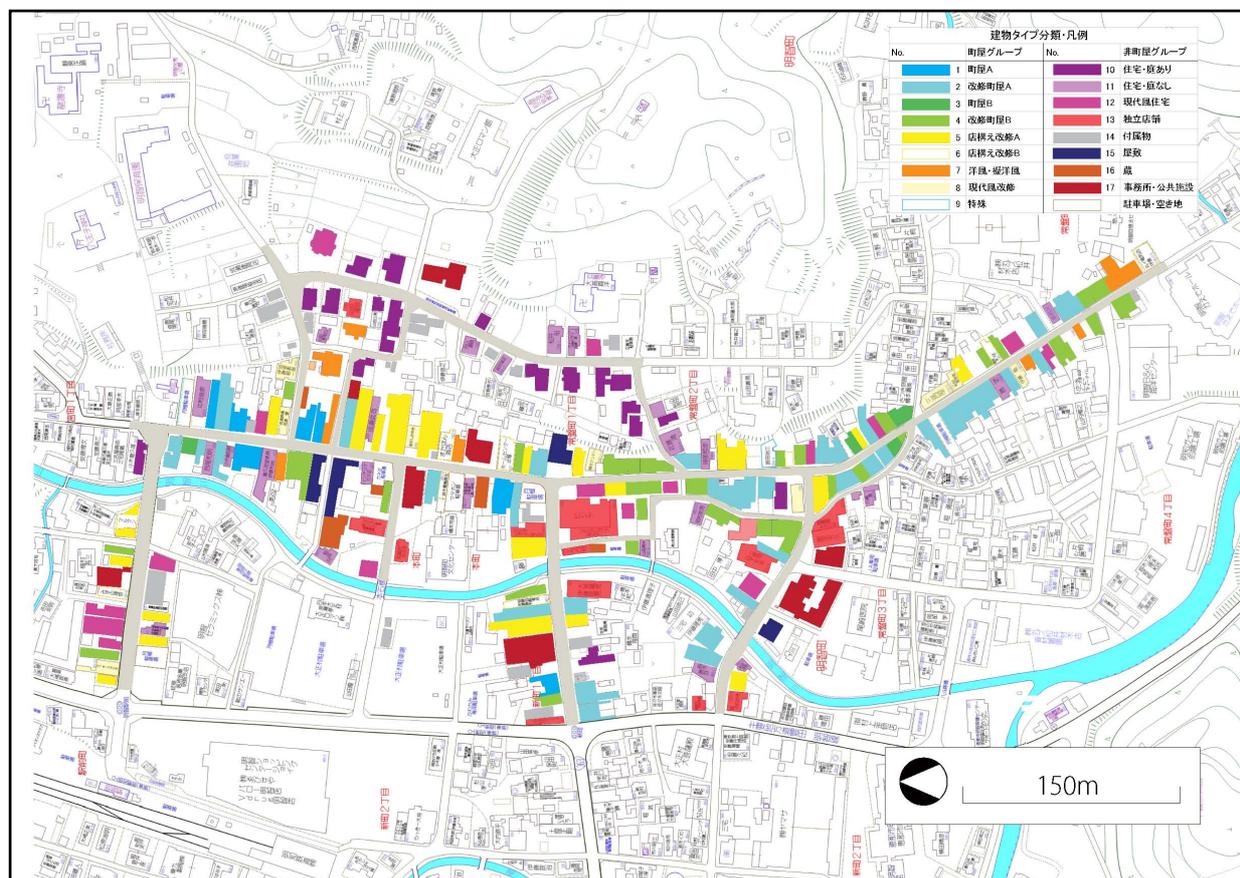


図1 建物タイプ別分布状況

次に、上記にも関連することとして、景観まちづくりの議論における景観や町並みのとらえかた、および表現の仕方についてである。小場瀬氏による写真指摘調査法による景観分析では、完全な街路通景ではないが、3軒程度を透視的にとらえた写真を用いて、そこに認められる景観構成要素への印象を分析している。またその印象は好ましい、好ましくないという評価軸による。従来の景観研究の多くが、こうした透視形態の秩序や印象を評価し、その要因を景観構成要素によって説明するという枠組みで行われていた。こうしたアプローチは、構図の整合性や視覚的秩序という見えの評価を行っていたといえる。一方、明智において著者らが試みている町並み調査は、街路通景の秩序や見えの調和よりも、町を構成している空間と建物の意味と構造的な特性、さらに言えばその形成メカニズムの特徵に力点を置いている。その理由は、視覚的な秩序の獲得が必ずしも地域の暮らしの持続的豊かさに繋がるとは限らないこと、目標として視覚的秩序を獲得を掲げてそのための方法を提示しても必ずしも実現しないこと、というこれまでの言わば狭義の景観整備の問題点を踏まえ、時代とともに変化していく地域の暮らしの場の形成メカニズムの調整としての景観まちづくりの必要性を痛感しているためである。

一例を挙げれば、文献4)では大正村としての町並み作りとしては最も問題があるとされたファサードを洋風ビルのように改修した建物は、著者らの分類では店構え改修タイプAとされ、図1に見られるように南北街道沿いでは本町にまとまって存在している。これは店舗としても規模が比較的大きく、ある時期に店舗としての先進性を表現しようとした結果であることが推察される。その意味では、地域の履歴と場所の特性を物語るものとして注目されてよい。この看板建築のファサードを取り払って、伝統的なものに改修することで、明治もしくは大正時代の街並みに近いものにするのは、理論上は可能である。しかし、その実現可能性と、たとえ実現した場合でも伝統的建造物群保存地区に指定されている隣の岩村に勝てるような観光的価値が生まれるかについては、疑問がある。

これだけ多様な顔をもつ町並みのある一つの意匠に整えていくのではなく、それぞれが語る地域の履歴を尊重し、そこから学ぶ今後の方向性を探ることの方に、まちづくりとしての可能性があると考える。同時に具体的な

ものの建設、生産、消費という産業を地域内経済循環として再生させることに資するまちなみづくりの方法を考える必要がある。

そのような考え方に基づけば、ひとまず街路通景としての町並みから離れ、構成要素である建物等の集積として町並みをとらえ、それら要素の意味と役割から議論する必要がある。このアプローチは街並みメッセージ論や記号論的分析に類似するが、現状の建築物等の意味的側面を介してそれが形成される社会的空間的構造の特徴を捉えたいと考えている。

なお、現在明智で試みていることは、学術的裏づけはなく、実践的試みであり、どのような道筋に至るかは地域住民の選択にゆだねられている。とはいえ、単なる視覚的秩序の向上という景観整備ではない景観まちづくりの必要性の提唱と方法の模索的提案を続けながらケーススタディとしての研究にしていきたい。

#### 参考文献

- 1) 瀬口哲夫：日本大正村における官民パートナーシップ、建築雑誌、Vol.108, No.1344, pp.36-37, 1993.
- 2) 三宅重夫：地域における総合活動としての日本大正村運動、都市政策、No.47, pp.78-87, 1987.
- 3) 坂口香代子・水野南緒：日本大正村―「大正百年事業」、Crec Vol.166, 中部開発センター、pp.95-107, 2009.3.
- 4) 小場瀬令二：日本大正村における街並形成の課題に関する考察―写真指摘調査法を利用した景観分析―、第24回日本都市計画学会学術研究論文集、pp.427-432, 1989.
- 5) 島田かおり・岡田智秀他：岐阜県恵那市山岡町地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果、第41回土木計画学研究・講演集、2010.6
- 6) 高村匡祐・出村嘉史他：岐阜県恵那市岩村城下地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果、第41回土木計画学研究・講演集、2010.6
- 7) 山口敬太・出村嘉史他：岐阜県恵那市岩村富田地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果、第41回土木計画学研究・講演集、2010.6
- 8) 佐々木葉・長谷川智也：地域景観認識の表現媒体としての絵図―岐阜県恵那市での試みから―、土木学会景観・デザイン研究講演集 No.6、2011.12

(2011.5.6 受付)

A case study of visual environment and community improvement respecting its historical vestiges in Akechi town, Gifu prefecture

Yoh SASAKI and Wataru IGETA